

氏 名	むら 村 上 しゅう いち
学位(専攻分野)	博 士 (農 学)
学 位 記 番 号	論 農 博 第 2372 号
学位授与の日付	平 成 13 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	Research on Ambiguity in Forms of Modern Landscape Design in the United States of America (米国近代ランドスケープ・デザインの形態にみる曖昧性の研究)
論文調査委員	(主 査) 教 授 吉 田 博 宣 教 授 増 田 稔 教 授 水 山 高 久

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、既往研究で近代芸術の影響が指摘された、米国近代ランドスケープ・デザインの4作家による空間形態に、彼らの空間思考にもとづく分析考察をおこない、近代の視覚芸術や建築に共通する形態の曖昧性(多重解釈性)を実証したものである。欧米の視覚芸術や建築における近代主義の空間成果に、機能的な明確さや合理的な均質さといった従来の近代空間観とは異なる、今日的な概念としての複雑さや多様性に通じる形態の曖昧性が注目されることが背景であった。4作家の思考および形態の分析考察の内容は、以下のように要約される。

1. チャーチ(1902-1978年)による著作27点(1933~55年:雑誌記事26点,図書1点)を調査し、機能・土地条件・素材性を重視する一方で、近代芸術の形態模倣に否定的な思考を明らかにした。また、床面意匠の記述より、曖昧な形態の可能性を示した。その記述をもとに、代表作であるドネル庭園(1948年)を対象事例として、図面資料および現地踏査記録をもとに空間を分析したところ、屋内外間のガラス面および床面意匠による曖昧性が認められた。また、園路沿いの視点移動にともなう曖昧性や、床面に投影された樹影の時間変化による曖昧性と、床面意匠との関係を明らかにした。
2. エクボ(1910-2000年)による著作25点(1937~69年:雑誌記事21点,図書4点)を調査した結果、空間構成・人の利用・素材性・土地条件を基本に、境界の多様化による多様な単位領域の形成という空間論を明らかにした。また、視覚芸術や建築における近代主義に対する積極的な意識を明らかにした。さらに、近代の空間成果を応用して考案したとする「自由な矩形」という形態に、曖昧な形態の可能性を示した。著作掲載事例のうち「自由な矩形」をもつ4事例を対象に、図面資料をもとに空間を分析したところ、高木列植・低木列植の直交配置による曖昧性が認められた。また、視点移動にともない体験される高木領域の形態変化、列毎に樹種の時間変化が異なることを、その配置の特徴として明らかにした。
3. ローズ(1913-1991年)による著作19点(1938~1987年:雑誌記事15点,図書4点)を調査し、天井・側面・床面によって構成されるヴォリュームを空間単位とする空間論を明らかにした。また、視覚芸術や建築の近代主義に対する積極的な意識を明らかにした。著作での出現頻度や建設経緯から、自邸(1953年)を対象事例として抽出した。現地調査および図面資料をもとに当該事例の空間を分析したところ、側面要素の視線透過性および要素の配置具合による曖昧性が認められた。また、要素の形態や配置と、主要動線上での視点移動による曖昧性、および現象や作家の形態改変による曖昧性との関係を明らかにした。
4. カイリー(1912年-)による著作2点(1982年,1999年)を調査し、機能によって空間単位を定め、屋外では樹木でもその単位を構成する空間論を明らかにした。また、樹間を抜けるという体験理念に、曖昧な形態の可能性を示した。その体験を実現すべく生み出した、格子配置の樹木をもつ1950年代の8事例を対象として抽出した。図面資料をもとに空間分析したところ、別空間を内包あるいは共存する格子配置による曖昧性が認められた。また、格子配置によって視点移動にともなう曖昧性が強められることを明らかにした。さらに、格子や列毎に樹種の時間変化が異なるという特徴を明らかにした。

上記の結果を総合的に考察し、視線の透過する構成要素による曖昧性、幾何学形要素の配置具合による曖昧性、という共通性を明らかにした。また、この2形式の曖昧性が、視覚芸術や建築における近代主義の空間成果に認められるものと共通

することを示した。さらに、2形式の曖昧性によって、視点移動に伴う曖昧性が強められるという近代建築との共通性を明らかにした。一方、2形式の曖昧性によって、時間経過に伴う曖昧性が強められるという当該事例の特徴を明らかにした。

論文審査の結果の要旨

近代ランドスケープ・デザインに関する従来の研究では、作家・作品をめぐる事実の発掘や社会背景との関係に議論の主眼が置かれてきた。空間形態についても分析考察がおこなわれてきたが、機能性の重視、あるいは諸条件への対応という、特定の見解が繰り返される。一方で、芸術や建築といった他領域における近代主義の展開とランドスケープ・デザインとの関係が解明されつつある。このような状況の中、本論文は、今日的体験を実現し得る空間成果を近代の視覚芸術と建築に曖昧性として見出したことを端緒に、その曖昧性が米国近代ランドスケープ・デザインの事例形態に共有されることを実証した。これは、近代の空間成果が当該事例の形態として反映されたことを示したものである。評価できる点は以下の通りである。

1. 近代ランドスケープ・デザインと、視覚芸術や建築における近代主義との関係性についての研究は数多くおこなわれているが、曖昧性という特性が共有されるという関係性を明らかにしたことに独自性が認められる。
2. 上記の実証のために、作家の空間思考を分析して表現意図あるいは空間単位規定を把握することで、形態の多重解釈をおこなうという、従来の研究には見られない新しい空間解釈手法を確立した。
3. 作家の空間思考に関する知見としては、チャーチの床面意匠に対する表現意図、エクボの空間論、ローズ、カイリーの空間単位規定、および4作家の近代視覚芸術や近代建築に対する意識を明らかにした。また、作品に関する知見としては、各作家の代表事例について、形態の特徴を明らかにした。
4. 4作家の事例に共通する形態特性を4形式の曖昧性について明らかにした。そのうち2形式の曖昧性について、近代の視覚芸術と建築に共通することを明らかにし、1形式の曖昧性について建築との共通性を明らかにした。

以上のように、本論文は、今日的な空間概念である多様性や複雑さに通じる特性を、近代の視覚芸術や建築に共通するものとして、近代ランドスケープ・デザインの空間に新たに見出したもので、ランドスケープ・デザインの歴史・原論研究にとどまらず、意匠・計画の研究に寄与するところが大きい。

よって、本論文は博士（農学）の学位論文として価値あるものと認める。

なお、平成13年2月14日、論文並びにそれに関連した分野にわたり試問した結果、博士（農学）の学位を授与される学力が十分あるものと認めた。